

「 御霊に満たされて 」

詩篇
エペソ人への手紙

第51篇10節～12節
第5章15節～21節

説教 岡村 恒 牧師

『むしろ御霊に満たされて歩きなさい。互に仕えあって生きればよい。』エペソ人への手紙は信仰を与えられて生きる生活の姿を描き出す手紙です。神は私たちを選び、信仰を与え、神のものとして下さるだけでなく、私たちを用いて御心にかなう実を結ばせてくださいます。だから、主イエスの光に包まれて生きたら良いと勧めた上で、3つの『何々でなくて何々』と言う対比によって語ります。

「そこで、あなたがたの歩きかたによく注意して、賢くない者のようにはなく、賢い者のように歩き、今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。」(15節～16節)主イエスの時代から二千年余りの戦争や貧困、災害、あるいは自分の人生の困難、深い悲しみに遭遇したことに目を留めると、決して楽しい光に包まれたような人生ではないと思うことがあります。しかし神は、この世界、あなたの人生を御子イエス・キリストの命を代償にして贖い取って下さいました。この事実を受け止め、神に喜ばれる仕方生きればよい。神を知る者として歩いたら良い。これが第1の対比です。

「だから、愚かな者にならないで、主の御旨がなんであるかを悟りなさい。」(17節)これが第2の対比です。さまよいながら目的地を目指します。気づくと自分が立つべき場所に立っていないことに気づかされる。初代のキリスト教会では、教会において信仰者が一緒に歩いている姿を、軍隊の隊列に例えました。もしそこからこぼれていくような者があったら引き戻して一緒に歩かせなさい、と勧めました。1人で信仰の道を歩むことは不可能なのです。

愚かな者、というのは主の御旨がなんであるかを悟らない者のことです。小さな自分が神に祈り、讃美して生き始める時、神が喜んでくださると聖書は言います。聖書は神の喜びについて語る書物なのです。そして喜びを味わい続けるように主イエスをこの世に送り、私たちを神のものとして、その手に握りしめてくださっています。この言葉は、今礼拝の場に身を置いておられる皆様に向かって語られている言葉です。

3つ目はとても面白い言い方です。「酒に酔ってはいけない。それは乱行のもとである。むしろ御霊に満たされて、詩とさんびと霊の歌とをもって語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい。」(18～19節)この対比は、

私たちの中に入る物を比べています。自分の心が求めるものを追い求めて生きる生き方が一方にあります。この対極に、聖霊に満たされて生きる生き方があるのです。聖書の約束は明瞭です。誰でも主イエスを救い主として信じ、洗礼を授けられるならば、その人には約束の賜物として聖霊が注がれます。それ以外のものに満たされることはないのです。欲望が求めるものに満たされて生きるのではなくて、聖霊に満たされて生き始めることができるのです。

そこで起こることが2つ描かれます。『互いに語り合うこと』と『神に感謝すること』です。これが実は、地上の教会で実現していることです。上に顔を見上げて神を褒め称えているその姿が、実は隣にいる人と言葉を交わすことと1つだと言うのです。いわば垂直の次元、神と人間の関係と、水平の次元、隣人、兄弟姉妹、家族、友人、夫婦、親子、主人と僕の関係という二つの方向について語られていきます。実は、この2つが1つの事として、私たちの人生のただ中で実現をしていくのです。

神が世界中の人の一人一人の心の奥底まで知り尽くしておられることを私たちは実感します。隣人と共に生きる中で神に出会うのです。そして主イエスの名によって感謝しながら生きて行くとき、互いに仕えあって生きるという生活が実現します。私の隣りに与えられた人も、神が愛し贖い取って神の子とした方、招いておられる存在です。その人が神を讃美して生きる時、神が喜ばれるのです。

神によって変えられていくとき、神を知り、神の霊に満たされて生きるのです。神の約束が、始めに在って、私たちはこの約束を信じて生きたらよいのです。聖霊が働いてくださるとき、それを妨げることが無いように、私に謙遜を与え信仰を与えてくださいと祈りましょう。

聖霊は主イエスの力のほんの一部が働きかけるという話ではありません。神と等しいお方が、私たち一人一人の内に住んで、その御業を実現して下さる。代々の教会はこのことを信じて歩んできました。御霊に満たされて主に感謝を捧げ、互いに仕えあって生きる。そのような信仰の歩みが、私たちの人生の中で実現していくことを信じ、その完成の日を共に願い求めながら歩みたいと思います。

(記 説教要約奉仕者)

